

19世紀ドレスデンの合唱協会と市民層

——「シューマン・ジングアカデミー」と「リーダーターフェル」の合唱活動を通して——

井上 登喜子

1. はじめに

本稿は、19世紀ドイツの市民の合唱協会活動、特に、ザクセン王国の首都ドレスデンの混声合唱団「ローベルト・シューマン・ジングアカデミー Robert Schumannsche Singakademie」と、男声合唱団「ドレスデン・リーダーターフェル Dresdner Liedertafel」という二つの合唱協会活動の実態を検討することにより、合唱という音楽的営みにおける市民の表現形態や音楽に対する価値観の一つの局面を呈示する試みである。

「シューマン・ジングアカデミー」と「リーダーターフェル」は、1830年代、40年代というドレスデンの合唱協会設立期に設立された、市民層—とりわけ「教養市民層¹⁾」による合唱協会である。

本稿の考察に用いる資料は、それぞれの合唱団の創立50周年を記念して刊行された『ローベルト・シューマン・ジングアカデミー創立50周年記念論文集』（ビュトナー Max Büttner (編)、58頁。以下、RSSD1898とする)と、『ドレスデン・リーダーターフェル創立50周年記念論文集』（ハルトヴィヒ Richard Hartwig (編)、224頁。以下、DL1889)である。RSSD1898、DL1889共に、合唱協会の会長(Büttner)や書記長(Hartwig)を中心とする会員によって執筆された協会活動の歴史的記録であり、これらを用いて合唱協会活動そのものを検討する研究は本稿が初めてである。19世紀末の執筆者が過去の活動を記述する「歴史叙述」の過程において、その内容には執筆者による一定の価値評価が含まれていると考えられる。しかし、これらの資料は、本研究にとって、設立当時からの活動の実態を把握するためだけでなく、執筆者を通して19世紀末の構成員の価値観や意識を知るといふ点においても重要である。

考察方法としては、第一に、RSSD1898、DL1889の記述から、両合唱協会の組織的特徴、演奏機会と演奏場所、演奏曲目のデータを抽出し、第二に、これらのデータを両合唱協会間で比較考察する。先行研究において、男声合唱協会は「社会的な合唱育成から大衆音楽的な共同体体験を経て、幅広い階層による愛国的な民族運動への道を辿った(Brusniak1995:775)」という政治的・社会的傾向の強調によって、混声合唱協会から切り離して論じられることが多い。しかし、本稿では、「シューマン・ジングアカデミー」と「リーダーターフェル」の活動を敢えて同じレベルに置いて比較考察し、両者の相違点のみならず、「男声合唱」、「混声合唱」という区分による考察からは見えてこない共通点を検討することによって、教養市民に特徴的な音楽行動を見出すことを試みる。

2. 両合唱協会の組織的特徴

混声合唱協会「シューマン・ジングアカデミー」と男声合唱協会「リーダーターフェル」の比較考察のため、最初に、設立の背景、メンバー構成、ドレスデンの諸合唱協会および宮廷音楽界との関わりから、両者の組織的特徴を呈示する。

「シューマン・ジングアカデミー」は1848年1月、R.シューマン Robert Schumann の呼びかけによって178名のメンバー(正会員108名:ソプラノ42、アルト21、テノール14、バス31、賛助会員70名)が集まり、「合唱協会 Verein für Chorgesang」の名で活動を開始した。1857年に「ドレスデン・ジングアカデミー Dresdner Singakademie」と名称を変更し、さらに1873年には、設立者を記念して「ローベルト・シューマン・ジングアカデミー」と改名し活動を続けた。1898年時点でメンバーは107名(正会員91名、聴衆会員16名)に減少している。

設立当初(1848-50)のメンバー構成および活動内容は、井上1998の資料研究により明らかであるが、その設立時のメンバーは、シューマン夫妻の弟子、ピアニスト、ピアノ教師、歌手、作曲家、教授、法律顧問官などの

正会員と、國務大臣、外交官、枢密顧問官、弁護士、画家、教授、工場経営者、銀行家、牧師などの賛助会員から構成されている²⁾。このように「シューマン・ジングアカデミー」は、「音楽的素養の高い」人々が含まれる、ドレスデンの「教養市民層」を主たる構成メンバーとする合唱協会であった。

運営組織としては、指揮者、会長、会長代理兼書記、会計委員、記録保管委員、記録保管委員代理（以上各1名）および女性役員（2名）という役職が置かれていた³⁾。指揮者は、シューマンの辞任後、音楽監督でオルガニストのR. プフレツチュナー Robert Pfretschner（1850-75在任）に引き継がれ、その後、作曲家でピアニストのF. バウムフェルダー Friedrich Baumfelder（1875-1898在任）に交替した。

また、設立時には、シューマンが提案した活動方針、「音楽による教養形成」を目指して、演奏のテクニクから演奏解釈に至る「厳密な練習」（井上1998：20）が行なわれており、市民の合唱協会の中でも「芸術的レベルの高い」団体であった（井上1998：26）。RSSD1898の編者となった会長ビュトナーは、この記念論文集の中で、シューマンを「ドイツの芸術史における記念碑」として仰ぐとともに、「シューマンのドレスデンにおける幾年かの活動の思い出」を保持し、「彼の不滅の作品の演奏に力を注ぐこと」こそ、活動目的であると記している（RSSD1898：38-39）。すなわち、「シューマン・ジングアカデミー」は、設立者シューマンを「ドイツの記念碑的芸術家」と仰ぎ、彼の方針に則って活動を続けること、彼の作品を保持することを自らの活動目的としていたのである。

一方、「リーダーターフェル」は1839年1月に、「ドレスデンの紳士」32名（テノール16、バス16）が集まって結成された（DL1889：3）。初期のメンバーは、宮廷オルガニスト、宮廷オペラ歌手や宮廷劇場の俳優など、宮廷音楽界との関係が見られるほか、弁護士、司法官試補、学生（卒業試験候補者）、官房職員、警部、教授、ピアニスト、オルガン奏者、彫刻家などのいわゆる「教養市民層」を中心に、銀行家やホテル経営者、書籍（楽譜）販売業といった商業・金融業、工場経営者や宝石商などの自営業、そして金利（年金）生活者など経済的・時間的余裕のある富裕市民層の集まりであった。1850年、60年代以降も依然として「教養市民層」を含む上層中産階級の参加率が高いが、徐々に商業・営業に携わる市民の入会が増え始め、設立時に比べると、より幅広い市民層を構成メンバーとして抱えることになった⁴⁾。

設立当初は、リーダーマイスター（合唱指揮者）、書記長、ターフェルマイスター（祝宴長）の三種類の役職が置かれたが、1842年に楽譜長、1875年には賛助会員から選ばれた代議員、さらに1881年からは会長と会計委員の役職が新たに加わるなど、徐々に組織の充実が図られた⁵⁾。すべての役職は2年ごとにメンバーの投票により選出されるという民主的な方法で運営された。リーダーマイスターも選挙により決定されたが、初代リーダーマイスターのライシガー C. G. Reissiger（1839年在任）をはじめ、ヴァーグナー R. Wagner（1843-45在任）やクレプス C. Krebs（1851-55, 60-65在任）といった歴代の宮廷楽長、聖十字架教会カントル兼音楽監督のJ. オットー Julius Otto（1840-42, 48-51, 55-58在任）、作曲家シューマン R. Schumann（1847-48在任）、そして19世紀後半にはケスラー Hans Kössler（1879-81在任）やフェルスター Alban Förster（1881-82在任）といったドレスデン音楽院の教師など、ドレスデンの音楽界の先導者たちがその任に就いている。

組織の機能拡充に従って、参加人数も増加し、1889年には380名の会員（名誉会員11名、正会員120名、賛助会員249名）を抱えるまでになった⁶⁾。また、創立50周年（1889年）、75周年（1914年）⁷⁾そして100周年（1939年）には盛大な創立記念祭が行なわれた。

以上のように、設立当初、両協会はドレスデンの「教養市民層」を中心とする富裕上層市民層から組織されており、両者間に際立った社会階層的相違は見出されないが、「リーダーターフェル」は、19世紀後半に、より幅広い富裕市民層に門戸を開くようになる。また、指揮者を含むメンバーの中には、同時期に両合唱団に所属する者もいた⁸⁾。

しかし、「シューマン・ジングアカデミー」に、男性の人数よりも圧倒的に多くの女性会員がおり⁹⁾、女性の役職が設けられ、夫婦や家族で参加するメンバーがいたのに対し、「リーダーターフェル」は開基祭 Kirmsfeier のような内輪の集いからも女性を排除するなど、当時のドイツの協会活動に典型的な男性社会であった¹⁰⁾。

ドレスデンで認定された男声合唱団は、1847年当時、「リーダーターフェル」の他に「オルフォイス Orpheus」、「アリオン Arion」、「リーダークランツ Liederkranz」、「オデオン Odeon」を加えた五団体であったが¹¹⁾「オルフォイス」を中心に、「ドレスデン男声合唱協会 Dresdner Männergesangverein」という地域連合組

織が結成されていた。「リーダーターフェル」はこの地域連合を通し、より大きな全ドイツ的連合組織「ドイツ合唱団連合 Deutscher Sängerbund」に参加することで活動規模を拡大していった¹³⁾。その一方、「シューマン・ジングアカデミー」は、ドレスデンの混声合唱協会「ドライシヒ・ジングアカデミー Dreyssig'sche Singakademie」¹³⁾と「ノイシュタット合唱協会 Neustädter Chorgesangverein」と共に、オラトリオ演奏を活動目的と認識し合い、ドレスデンの音楽生活圏内で活動を展開した。とはいえ、男声合唱協会と混声合唱協会の間には全く接点がなかったわけではない。1860年代まで、「リーダーターフェル」と「シューマン・ジングアカデミー」の間には共同演奏会における協力関係がみられる¹⁴⁾。

3. 演奏の機会

合唱活動の実態を検証するため、RSSD1898、DL1889の記述から演奏活動のデータを抽出し、演奏機会と演奏場所に従って整理・分類したものが表1-①、②である。以下、表1のデータをもとに、「シューマン・ジングアカデミー」と「リーダーターフェル」の演奏機会について、(1)メンバーおよび参加を認められた人々によって共有される「私的な演奏機会」と、(2)聴衆を対象とした「公的な演奏機会」という二種類の区分に従って比較考察を行なう。

(1) 私的な演奏機会

「私的な演奏機会」には、「創立記念祭」および開基祭やハイキング、小旅行、パーティーなどの「社交的活動」が含まれる。

「創立記念祭」は、「リーダーターフェル」と「シューマン・ジングアカデミー」にとって、集団内の交流を図るという社交目的のために重要なものであった。通常、メンバーと招待客という内輪の集いで開かれる演奏会のほかに、祝宴と舞踏会が用意された。創立25周年、50周年には、演奏会、記念祭、祝宴などの催しが2、3日かけて盛大に行なわれ、そのような機会には同僚の合唱協会が招待された¹⁵⁾。

「社交的活動」は、合唱団のメンバーに、より打ち解けた交流や楽しみの機会を与えた。「リーダーターフェル」では、「開基祭」や「カーニバル」、「鳥撃ちの会」、あるいは、ドレスデン近郊—ピルナ、シャンダウ、ボーデンバッハーへのピクニック、蒸気船でのエルベ川下りなど多様な催しが計画された。また、「リーダーターフェル」のメンバーは、19世紀後半になっても、セレナードと称する慣習を保持しており、しばしば、晩に松明を手を持って対象者の自宅前に集い、賛美、敬愛、感謝などの気持ちを込めて男声合唱によるセレナードを贈った¹⁶⁾。

「シューマン・ジングアカデミー」の「社交的活動」に関する具体的なデータは、設立当初の幾つか—汽船によるマイセンへの小旅行、ピルニッツへの遠足など—に限られているが、「より内輪の集いでお祝いの機会に揃った時には、オペレッタを上演したり、夏には、シューマンが採り入れた方法にちなんで楽しい歌旅行を企てたり、緑の中で朗らかな春の歌を歌ったりした」(RSSD1898:23)という記述から、その後も「リーダーターフェル」と同様に、ピクニックや小旅行、祝いの集いなどの社交的機会があったと考えられる。

(2) 公的な演奏機会

「公的な演奏機会」には、純粋に演奏を目的としたコンサート、慈善目的のための演奏会、教会歴の祝日、「枝の主日」や「聖金曜日」などに催される「宗教コンサート」、市や王室関係の行事・記念式典、そして合唱祭などが含まれる。

純粋に演奏を目的としたコンサートは単独で催されることが多かったが、宮廷オペラ歌手や室内楽演奏家、ピアニストなどのソリストや他の合唱協会と共同で演奏会を開くこともあった¹⁷⁾。19世紀中葉のドレスデンでは、コンサート・ホールの不足のため、野外演奏会という現象が生じたが(Härtwig et al.1994, 樋口(訳):92)、室内の演奏会場であるオテル・ド・サクス Hôtel de Saxeの広間やハーモニの広間 Harmonie Saalなどと併行して、野外演奏会の舞台である、グローサー・ガルテン Großer Garten やアウフ・デム・リンケシェン・バーデ Auf dem Lincke'schen Bade、ブリュールのテラス Brühlsche Terrasse、ヴァルトシュロスのテラス Terrasse des Waldschlößchensなどが用いられた。このような状況は、演奏目的のコンサートのみならず「創立記念祭」や「慈善演奏会」でも同様であった。1870年にドレスデン初のコンサート・ホール、ゲヴェルベハウス (Gewerbehaus

商工組合会館)のホールが完成してからは、ここで演奏会が開かれることが多くなった¹⁸⁾

「宗教コンサート」は、1870年代後半以降の「シューマン・ジングアカデミー」の活動の中で重要な位置を占めている。「シューマン・ジングアカデミー」は、ドレスデンの聖母教会 Frauenkirche、聖十字架教会 Kreuzkirche、三王教会 Dreikönigskirche という主要な三教会で催される「贖罪の日のコンサート」(1877～)、「聖金曜日」の演奏会(1884～)、「クリスマス・コンサート」(1884～)に定期的に携わっている。また、宮廷楽団により、宮廷劇場で催された「枝の主日のコンサート」¹⁹⁾には、1877年から83年まで7回にわたって参加した記録がある²⁰⁾

「慈善演奏会」は、「リーダーターフェル」の演奏機会のうち大きな割合を占めている。「エルツ山脈の貧しい人々のため(1847)」、「五月事件の負傷者と孤児のため(1849)」、「聾啞の少女の保護施設のため(1863)」、「シュレスヴィヒ・ホルシュタインの戦いで困窮している人々のため(1864)」、「1866年に戦死した兵士の追悼のため(1867)」、「(普仏)戦争に行っている兵士の家族のため(1870)」、「ドレスデンの野戦病院のため(1870)」という具合に、ドレスデン革命(1849)から普墺戦争(1866)、普仏戦争(1870)を経てドイツ帝国の統一(1871)へと向う中で、次第に愛国的な目的をもつ慈善演奏会が増えた。とりわけ、1870年夏から71年にかけて愛国的・政治的気分はその頂点に達した。1870年の夏から計8回の「愛国的な歌の夕べ」が催されたが²¹⁾それはまさに、「兄弟愛という理想を、次第次第に政治色を強めてははっきりと口にしようと思わなければならないと考えていたエリート意識」²²⁾の反映であった。このような愛国的慈善演奏会では、ヴァルトシュロスのテラスなどの野外演奏会場が格好の舞台となり、数千人単位の聴衆が集まった。しかし、1870年代後半に入ると、際立った政治的傾向を持つ慈善演奏会の開催数は減少していった。

一方、「シューマン・ジングアカデミー」は設立当初から一貫して、愛国的・政治的傾向とは一線を画していた(井上1998:26)。RSSD1898には、「火災の犠牲になった宮廷劇場のため(1869)」、「バルト海沿岸の高潮による被害を受けた人々のため(1873)」の慈善演奏会をはじめ、幾つかデータがあるものの²³⁾その回数は少なく、「リーダーターフェル」に比べて、社会的・政治的関わりが希薄であったことを示している。

市や王室の行事における演奏機会も、「リーダーターフェル」の活動の中で大きな割合を占めている。R.ヴァーグナーの提唱によって、1844年にヴェーバー C. M. v. Weber の遺体がロンドンから移送され、ドレスデンで埋葬された際、「リーダーターフェル」が「オルフォイス」や「ドライシヒ・ジングアカデミー」と演奏を担当したのはその一例である。また、「ヴェーバーの記念碑設立基金募集のため」に慈善演奏会を開き(1841, 1858)、記念碑完成後の「除幕式(1860)」でも演奏している。この一連の出来事には、ドレスデンの地でドイツ・オペラを創始し、その質と地位の向上に尽力したヴェーバーを、「ドイツ的芸術」の伝統上にある「記念碑的作曲家」へと神格化するプロセスが見られるが、ドイツの作曲家を神格化する価値観がドレスデンの教養市民層に浸透し、彼らの実践活動と結びついている点は非常に興味深い。

また、「合唱祭」への参加は、「リーダーターフェル」の活動のネットワークを確実に拡大した。「第1回ドイツ合唱団連合祭(1865)」²⁴⁾がドレスデンで開催された際に、「リーダーターフェル」は「ドレスデン合唱団連合」の一員としてその準備・運営を行なったが²⁵⁾この機会にピッツバーグ(アメリカ)の男声合唱協会「フローズン Frohsinn」と兄弟合唱団の関係を結んでいる。また、「ケルンの国際合唱コンクール(1880)」での第一位入賞が内外のジャーナリズムで報じられると、「リーダーターフェル」の知名度は上がり、ライブチヒのゲヴァントハウスやベルリン・ジングアカデミーなど、他の音楽都市の権威ある場で演奏する機会が与えられるようになった²⁶⁾

以上のように、ドレスデンの教会や宮廷劇場での「宗教コンサート」に重点を置く「シューマン・ジングアカデミー」と、「慈善演奏会」や「合唱祭」への参加によって、政治的・社会的影響を受けつつ、外界へのネットワークを広げる「リーダーターフェル」の間には、「公的な演奏機会」における活動の方向性の相違が見られる。他方、両合唱協会に共通する、「創立記念祭」や「社交的活動」といった「私的演奏機会」を重視する態度は、両者が協会活動における「社交文化」の役割²⁷⁾を高く評価していたことを示しているが、そこには、社会階層、趣味、価値観などを同じくするエリート集団の特権階級的な態度も見られる。

4. 演奏曲目

「シューマン・ジングアカデミー」は、ビュトナーが「オラトリオの演奏を目的とした」(RSSD1898:30)と記しているように、「宗教コンサート」のみならず、演奏会用広間やコンサート・ホールで行なわれる創立記念祭やコンサートにおいても、主としてオラトリオを演奏した。

表2にまとめたように、バッハの受難曲、ベートーヴェンの《橄欖山上のキリスト》、ヘンデルの《メサイア》、ハイドンの《四季》、《天地創造》、メンデルスゾーンの《聖パウロ》、グラウンの《イエスの死》、シューマンの《楽園とペリ》、《ゲーテの〈ファウスト〉からの情景》、《ばらの巡礼》、ゲーゼの《コマラ》、ルビンシュタインの《失楽園》、そしてバウムフェルダーの《ルター・カンタータ》など、19世紀の市民の合唱協会で受容された古典的レパートリーから、ドイツ・ロマン主義的オラトリオ、同時代作曲家の新しい作品まで、さまざまなオラトリオがレパートリーに名を連ねていた²⁸⁾さらに、オラトリオに加えて、メンデルスゾーンの《森への別れ》、シューマンの《流浪の民》、ヒラーの《水の精の歌》などの混声合唱曲も重要なレパートリーであった。

上記のレパートリーの傾向は、過去の作品から新しい作品まで取り上げるという、シューマン指揮下(1848-50)の初期の活動で確立された方向性を引き継いでいるが(井上1998:20-23)、その当時演奏された16、17世紀のア・カペラ合唱曲が姿を消す一方で、ヘンデル、ハイドン、メンデルスゾーン、シューマン等のオラトリオが時代の経過と共に「古典的」レパートリーとして、より一層定着してきたことを示している。

それに対して、「リーダーターフェル」の場合は、演奏機会、演奏の場、そして時代の変化という要素が媒介変数となって、その演奏形態に多様性を与えている。「リーダーターフェル」のさまざまな演奏機会と演奏曲目の具体的な関係を示したものが表3である。この表3から、演奏曲目(上演作品)の傾向は、以下の四種類に分けられる。

第一に、シューベルトの《サルヴェ・レジナ》、シューマンの《同盟者の夜警》、《苦しみの谷においても絶望するなかれ》、ヴァーグナーの《使徒の愛餐》、ライシガーの《狩の歌》など、同時代の指導的作曲家による男声合唱曲のレパートリー。これらは主に、創立記念祭、コンサート、そして慈善演奏会で歌われた。第二に、大衆の間で非公式の国歌に祭り上げられた《ラインの監視人》をはじめ、《万歳、ゲルマニア》、《誠実なるドイツの心》などの一連の大衆的・愛国的男声合唱曲。これは、60年代後半以降の愛国的・政治的性格を帯びた慈善演奏会や政治集会で歌われ、聴衆の間で絶大な人気を博した。第三に、音楽と演劇的要素とユーモアが結合した領域で、創立記念祭や開基祭の場で上演された祝典劇、笑劇、喜劇オペラ、既存の劇作品のパロディなど。そして第四に、ハイドンの《天地創造》、メンデルスゾーンの《コロノスのエディプス》、シューマンの《ばらの巡礼》などオラトリオや管弦楽付き合唱曲のレパートリー。これらは混声合唱作品であり、「リーダーターフェル」が単独で演奏することはなかったが、「シューマン・ジングアカデミー」との共同演奏会や宮廷劇場における「枝の主日のコンサート」で歌われた。

このように、「シューマン・ジングアカデミー」のレパートリーが、演奏機会にかかわらず、オラトリオを主軸としているのに対し、「リーダーターフェル」の場合は、さまざまな演奏機会に対応してレパートリーも多様化している。

5. 結び

混声合唱協会「シューマン・ジングアカデミー」と男声合唱協会「リーダーターフェル」の間には、先行研究で指摘されている相違点、すなわち、オラトリオ演奏を本分とする混声合唱協会と、政治的動乱の時代を反映する男声合唱協会の愛国的・政治的傾向といった相違点が明らかに存在している。

しかしながら、本稿では、このようなステレオタイプ化した相違点よりも、幾つかの注目すべき共通点の方に光を当てたい。本稿の比較考察から明らかになった「シューマン・ジングアカデミー」と「リーダーターフェル」の共通点は以下の五点である。

(1)宮廷音楽界とのつながり: 政治的動乱期も含め19世紀末まで、メンバー構成や演奏協力の点で宮廷音楽界とのつながりが密接であった。(2)両者間の演奏協力関係: 1860年代まで、共同演奏会が数回催された。これは、両合唱協会間のメンバーの重複など、社会階層的な結びつきが存在したためと考えられる。その際、「リーダー

ターフェル」が「シューマン・ジングアカデミー」とオラトリオを演奏することもあった。(3) **社交や楽しみの領域の重視**：19世紀後半、「リーダーターフェル」の政治的傾向が強い時期も含め、一貫して「創立記念祭」や社交的活動が大切にされた。この私的な集いには、「リーダーターフェル」の開基祭に見られる女性の参加禁止や、両合唱協会に共通する、他の階層から差別化を図る態度など、いわば特権階級的なふるまいが見受けられる。(4) **演奏の質にこだわりを持つ態度**：両合唱協会は、社交や楽しみの領域を大切にする一方で、演奏の質を高めるための練習など、真摯な音楽活動も行なった。「シューマン・ジングアカデミー」では設立当初からテクニクのための「厳密な練習」が行なわれたが（井上1998：20）、「リーダーターフェル」には漸く1870年代末から演奏の質を重視する傾向が見られるようになり²⁹⁾ 1880年の「ケルン国際コンクール」での一位入賞後は、さらにその傾向を強めた。このコンクールでの一位獲得は、19世紀後半に濫立した多くの「並みの協会」（DL1889：123）を励まし、結果としてドレスデンの男声合唱活動は全盛期になったが³⁰⁾ 「リーダーターフェル」は、「一流」として優位を保つことで、大衆化する他の男声合唱活動から自らを差別化していったといえる。(5) **「ドイツの記念碑的作曲家」の形成への実践的レベルでの協力**：シューマンおよびヴェーバーに対する「ドイツの記念碑的芸術家」という評価は、ともに19世紀から20世紀初頭にかけて教養市民層の音楽史家たちが作り上げた「音楽におけるドイツの優位性」という価値観を反映している³¹⁾ その価値観が、両合唱協会のメンバーに共有されていたことは、今回検討した資料より明らかである。また、記念碑建設が慈善演奏会による寄付金募集によって支えられていたことから、合唱協会による実践活動がその価値観の形成に対して一定の貢献をしていたと考えられる。

以上のように、両合唱協会の間には、社会階層的な重なりから生じる共通性（1、2）、活動における態度の共通性（3、4）、そして、ドイツの音楽文化との関わりにおける共通性(5)を見出すことが出来る。これらの共通点は、「男声合唱」、「混声合唱」という区分から考察される相違点以上に、両合唱協会の構成メンバーが所属していた社会階層の持つ特徴的な傾向を呈示している。そこには、他の階層から差別化を図る、「排他的な」エリート意識や自国の文化・芸術に「自分たちの拠るべき価値観と行動規範」を見出そうとする姿勢が表れている³²⁾ その社会階層とは、「教養市民層」という語で区分される階層のことである。本稿では、音楽活動から、この「教養市民層」を特徴づける価値観の一局面を明らかにすることが出来たが、「教養市民層」の文化・芸術に対する価値観と音楽活動の問題は更なる考察が必要であり、今後の課題としたい。

表1 演奏機会の分類と演奏場所 (DL1889, RSSD1898より、井上作成)

① リーダーターフェル (1839-1889)

演奏機会	回数／演奏記録数	演奏場所 (一例)
創立記念祭	33／277	Thiemes Hötél, Brauns Hötél, Gewerbehaus, Auf dem Lincke'schen Bade, Kreuzkirche
コンサート	65／277 (単独：26／277, 共同：39／277)	Hötél de Saxe, Meinholds Saal, Gewerbehaus, Großer Garten, Bach'scher Saal, Terrasse des Waldschlößchens, Hoftheater
慈善演奏会	54／277 (単独：40／277, 共同：14／277)	Hötél de Saxe, Großer Garten, Thiemes Hötél, Schmidt'sche Conditorei, Harmonie, Hoftheater, Auf dem Lincke'schen Bade, Frauenkirche, Terrasse des Waldschlößchens, Gewerbehaus
枝の主日	2／277	Hoftheater
市の行事、王室の祝い事など	36／277	Meinholds Saal, Belvédère (Brühlsche Terrasse), Hoftheater, Schiller-St.
合唱祭	13／277	Frauenkirche, Terrasse des Waldschlößchens, (他都市：Hamburg, Nürnberg, Köln)
社交的活動 (開基祭、小旅行、ハイキング等)	54／277	Meinholds Saal, Schandau, Pirna, Priessnitzgrunde, Bastei, Bodenbach, Loschwitz, Teplitz
セレナード	20／277	(対象者の住居前)

② シューマン・ジングアカデミー (1848-1898)

演奏機会	回数／演奏記録数	演奏場所 (一例)
創立記念祭	26／141	Auf dem Lincke'schen Bade, Börsensaal, Gewerbehaus, Neust. Kasino, Meinholds Saal
コンサート	42／141 (単独：31／141, 共同：11／141)	Cosel'scher Saal, Hoftheater, Hötél de Saxe, Großer Garten, Gewerbehaus, Kaiserhof, Auf dem Lincke'schen Bade, Musenhaus
教会 (宗教) コンサート	48／141	Frauenkirche, Kreuzkirche, Dreikönigskirche
慈善演奏会	5／141	Harmonie, Hötél de Saxe
枝の主日	7／141	Hoftheater
市の行事、王室の祝い事など	8／141	Großer Garten, Altmarkt, Gewerbehaus
社交的活動	5／141	Meissen, Pillnitz, Kreischa, Elysium

注1) 表中の数字は、分母がデータの総数を、分子が各項目の該当数を示す。

注2) 「単独」とは「リーダーターフェル」、「シューマン・ジングアカデミー」による単独の演奏会、「共同」とはソリストや他協会と共同で開催した演奏会を示す。

注3) 演奏場所は資料に記載されないこともあるため、各項目につき、抽出したデータの中から使用頻度の高い場所を一例として挙げた。ただし、「枝の主日のコンサート」と教会コンサートに関しては表中に記されたデータがすべてである。

表2 「シューマン・ジングアカデミー」(1848-1898)の演奏会での演奏曲目の一例
(RSSD1898より、井上作成)

作曲家名	作品名	演奏年(2度以上のもの)
J. S. Bach	ヨハネ受難曲 マタイ受難曲	1848, 49, 63, 85 1878, 81, 92, 95
Baumfelder	湖上の城 <i>Das Schloß im See</i> 詩編第71編 ルター・カンタータ <i>Luther-Kantate</i>	1881, 86, 93 1881, 87 1883, 89
Beethoven	ミサ・ソレムニス オラトリオ 橄欖山上のキリスト 交響曲第9番 合唱付	1848, 69, 79 1877, 88, 90 1877, 80, 82, 97
E.E.H.Böhme	森へ <i>Zum Walde</i>	1880, 84
Brahms	ドイツ・レクイエム	1878, 94
M. Bruch	聖家族の逃走 <i>Flucht der heiligen Familie</i>	1887, 93
Cherubini	レクイエム	1849, 88
N. W. Gade	コマラ <i>Comala</i> 春の知らせ <i>Frühlingsbotschaft</i> プシュケ <i>Psyche</i>	1848, 49, 85 1859, 80 1883, 86, 94
C. Grammann	葬送カンタータ <i>Trauerkantate</i>	1895, 97
Graun	イエスの死	1866, 95
Händel	メサイア サムソン 聖セシリアの日のためのオード ユダス・マカベウス エーシスとガラティア テオドラ	1869, 77, 80, 87, 90, 92, 96. 1878, 84 1880, 82 1882, 89 1884, 89 1886, 94
Haydn	四季 天地創造	1866, 78, 91, 95 1887, 90, 97
F. Hiller	水の精の歌 <i>Gesang der Geister über den Wassern</i>	1859, 85
H. Hofmann	美しい海の精メルジーネのお伽話 <i>Das Märchen von der schönen Melusine</i>	1884, 87
Ad. Jensen	花嫁の歌 <i>Brautlied</i>	1885, 93
Mendelssohn	森への別れ アタリー 聖パウロ 讃歌 キリスト エリア 詩編第42編	1848, 59, 81 1850, 64 1863, 69, 81, 84, 96 1868, 83, 88 1885, 91, 94 1886, 90, 97 1892, 94
Mozart	レクイエム	1863, 84, 88
Rubinstein	失楽園 <i>Das verlorene Paradies</i>	1876, 79, 84, 85, 93
Schumann	流浪の民 私の心は村へ引き寄せられる ゲーテの「ファウスト」からの情景 楽園とペリ ばらの巡礼 うたびとの呪い 小船	1848, 73, 81, 90, 96 1848, 73, 80 1848, 49, 79 1850, 73, 82, 98 1852, 60, 68, 73, 81, 92 1859, 85 1873, 80

注1) 表には、2度以上演奏された作品のみをまとめた。

注2) 作品名の邦訳は、『音楽大事典』(下中邦彦編、平凡社)、『ニュー・グローヴ世界音楽大事典』(柴田南雄;遠山一行(編)、講談社)を参考にした。井上による訳には原綴を付加した。

表3 「リーダーターフェル」(1839-1889)の演奏機会と演奏曲目の一例
(DL1889より井上作成)

演奏機会	演奏場所(指揮)	作曲家名	作品名
慈善演奏会 「エルツ山脈の貧しい 人々のため」 1847年3月16日	Hôtel de Saxeの広 間 (F. Hiller)	N. W. Gade Hiller Schubert Dürner Lübke Hiller Seiffert Reissiger Beethoven	序曲「高原で」 演奏会序曲 サルヴェ・レジナ 水夫の歌 海底にて 騎手の歌 セレナード 狩の歌 祝典劇《アテネの廃墟》から
共同コンサート ・シューマン・ジグアアカデミーと 1852年12月3日	Hôtel de Saxeの広 間 (Krebs)	Mendelssohn Schumann	コロノスのエディプス ばらの巡礼
創立16周年記念祭 1855年2月14日	Thiemes Hôtel	「1955年、或いは、すげなく断られたパンケーキ。2幕 のオペラ・セリア形式の謝肉祭の笑劇」	
共同コンサート ・シューマン・ジグアアカデミーと 1864年2月29日 第1部：リーダーターフェル 第2部： シューマン・ジグアアカデミー	Auf dem Lincke'schen Bade	第1部： Schubert Schumann E. Veit Mendelssohn (Volkslied) Schumann J. Raff 第2部： Mendelssohn	サルヴェ・レジナ 同盟者の夜警 美しいロートラウト姫 コロノスのエディプス(合唱) 青・白・赤 黒・赤・黄金 目覚めよ、と呼ぶ声あり アタリー
創立25周年記念祭 1864年11月9日(1日目) (コンサート終了後、 Auf dem Lincke'schen Badeで大規模な祝宴) 1864年11月10日(2日目)	Kreuzkirche	Bach Naumann J. Otto Haydn Schumann Pfretzschner Reissiger	フーガ(E-Dur) コラール「賛美と感謝あれ」 詩編第23編「主はわが羊飼ひ」 天地創造より 苦しみの谷においても絶望す るなかれ サルヴェ・レジナ 讚美歌「王は主なり」 オルガン演奏(Fr. Reichel)
慈善演奏会 「愛国的歌の夕べ」 1870年7月26日(第1 回)~12月29日(第8回)	Terrace des Waldschlößchens	Carl Wilhelm	ラインの監視人 「万歳、ゲルマニア」、「誠実なるドイツの心」、 「今やすべての神に感謝せよ」、「ドイツ陸軍の軍歌」他
枝の主日のコンサート 1876年	Hoftheater (Schuch)	Haydn	天地創造
共同コンサート ・オルフォイスと 1886年2月初め	Frauenkirche (Becker)	Wagner	使徒の愛餐
開基祭 1886年11月末	Bach'scher Saal	劇の冗談 テクスト：Dr. Poetzsch 「アメリカのリーダーターフェル」	

注1) 資料(DL1889)に記述されていない日付、指揮者名などは表中で空欄になっている。

注2) 作品名の邦訳は、『音楽大事典』(下中邦彦編、平凡社)、『ニュー・グローヴ世界音楽大事典』
(柴田南雄；遠山一行(編)、講談社)を参考にした。

注

- 1) 教養市民層 Bildungsbürgertum という語は多義的かつ歴史的に変化しているが、本稿では、大学教育を受け、大学教授、裁判官、高級行政官僚、弁護士、医師、芸術家、ジャーナリストなどの職業に就く、社会の「文化エリート」を指す。教養市民層は排他的で、一個の身分としての性格の強い、ドイツに特有な社会階層であった(野田1997:13-16)。
- 2) 1898年当時の構成員のリストはRSSD1898:57-58にあるが、職業に関する情報はない。氏名から判断すると未婚の女性、夫婦、家族での参加者が多いことから、やはり、富裕市民層中心であったと推測される。
- 3) RSSD1898:57。ただし、1898年当時の役員の記載のみで、それ以前の役員や任務期間などの詳細はわからない。
- 4) DL1889:196-211。巻末に入会者リストがある。
- 5) 各役職につき2名ずつポストがあった。1881年以前は書記長が会長の役割を、祝宴長が会計委員の仕事を兼任した(DL1889:191-195)。
- 6) JB1888 89:9。
- 7) DL1914。
- 8) レーヴェ教授Dr. Löwe、商人バルテルデス Barteldes、ピアニストのブラースマン Blassmann、作曲家のナウマン E. Naumann、指揮者のプフレツシュナー Pfretzschner とバウムフェルダー Baumfelder 等。
- 9) ソプラノは1848年に108名中42名(アルトを含む女性正会員数は108名中63名)、1898年には91名中46名(91名中62名)であった。
- 10) 1857年に開基祭への女性同伴禁止を決定。メンバーには家庭で待つ妻や家族への土産としてケーキが配られた(DL1889:28)。しかし、ハイキングなどの社交活動には家族の参加が認められた。
- 11) NZfM, Vol. 27, No. 40:239。なお、「オルフォイス」(1834年設立)と「リーダーターフェル」は「兄弟合唱協会」と呼び合う関係であった。
- 12) このような大規模な男声合唱活動は労働者にも波及したが、労働者の合唱協会は最初から市民の合唱協会と一線を画していた。ドレスデン初の労働者合唱協会「アルペングリューン Alpen glühn」は1884年に警察の監視下、設立された。また、「ドレスデンと周辺地域の労働者合唱団連合」(1891)には18団体、799名が結集した(Eckhardt1978:49)。
- 13) 1807年にドレスデンの宮廷オルガニスト、アントン・ドライシヒの提唱により設立された混声合唱協会。
- 14) DL1889:24, 31, 39, 56, 1852, 59, 64, 68年に共同演奏会を行なった。
- 15) 「リーダーターフェル」と「オルフォイス」は、互いの25周年祭、50周年祭に参加している。また、「シューマン・ジングアカデミー」は「ノイシュタット合唱協会」とともに、「ドライシヒ・ジングアカデミー」の75周年祭に参加している。
- 16) セレナードを贈る対象者は女性よりも男性の方が多く、指揮者ヴァーグナーをはじめ、合唱協会に長年貢献した首脳メンバーや演奏協力をした宮廷オペラ歌手、そして王室の人々などであった。
- 17) 歌手のミヒャレージ夫人 Frau Krebs Michalesi、宮廷俳優ダーヴィソン Bogumil Dawison、ピアニストのクララ・シューマン Clara Schumann やブラースマンなどがソリストとして活躍した。
- 18) 「リーダーターフェル」は1882年以降、ゲヴェルベハウスの練習用広間と練習の前後にお酒を飲む部屋 Kneipezimmer (正会員用と賛助会員用の二部屋)を借りた。コンサートには大ホール(二千人以上収容)を借りた(DL1914:12)。
- 19) イタリア・オペラの指揮者モルラッキが1826年にオーケストラ団員の未亡人や孤児の援助の為に始めた(Härtwig et al. 1994, 樋口(訳):90)。
- 20) 「リーダーターフェル」は1875、76年に参加した(DL1889:89)。
- 21) 第1回~第6回は1870年7月26日から9月7日に開催。第7回は11月27日、第8回は12月29日に「出征中の兵士の子供たちへのクリスマスプレゼントのために」催された。
- 22) Salmen1988=1994:71。
- 23) なお、これらの宗教演奏会の収益や寄付金等の支出に関する具体的な記録は残っていない。
- 24) 二万人の合唱団員がドイツ内およびイギリス、ロシア、ポーランド、パリ、ピッツバーグ、フィラデルフィアからドレスデンに集った。
- 25) 1863年3月に準備委員会が設置され、6月には「ドレスデン合唱団連合」として「リーダーターフェル」の他、「オルフォイス」、「リーダークライス」、「リーダー克蘭ツ」、「ストラデッラ」が集まった。1864年9月末に、「ドイツ合唱団連合DSB」の全体委員会が開かれた。
- 26) 当時のリーダーマイスターのケスラー(1879-81在任)は、「響きの美しさ、発音、音の保続、アインザッツの正確さなど技術的な面で厳しい要求をした」ため、次第に演奏の質が上がった(DL1889:97)。
- 27) 音楽協会活動は社交文化、教育的役割、市民の自己表現という機能を持っていた(Dahlhaus1980:142-143)。

- 28) その他、ヘーガー F. Hegar、ライネッケ C. H. C. Reinecke、ブルッフ M. Bruch、ラインベルガー Rheinberger 等の同時代作曲家の作品が取り上げられている（演奏回数1回のため、表2には載っていない）。
- 29) DL1889 : 97.
- 30) 注12参照。
- 31) 19世紀の音楽史叙述における「音楽におけるドイツの優位性」の確立過程については、Reimer1993 : 17-31参照。
- 32) 野田1997 : 39-40.

文献（本文および注で言及したもの）

（記念刊行物、報告書、新聞雑誌は以下の略号を使用。）

- DL1889=*Festschrift zur Feier des fünfzigjährigen Bestehens der Dresdner Liedertafel*. [HARTWIG, Richard(Hg.)] Dresden: Verlag der Hofmusikalienhandlung von G. Näumann.
- RSSD1898=*Robert Schumannsche Singakademie zu Dresden. Begründet am 5. Januar 1848. Festschrift zur Feier des 50jährigen Jubelfestes am 5. Januar 1898*. [BÜTTNER, Max(Hg.)] Dresden: Druck von C. Heinrich.
- DL1914=*Erinnerungsblätter zusammengestellt von einem alten Mitglied anlässlich der Feier des 75jährigen Bestehens der Dresdner Liedertafel*.
- JB1888/89=*Jahresbericht über die Wirksamkeit der Dresdner Liedertafel im fünfzigsten Vereinsjahre 1888/89*.
- NZfM=*Neue Zeitschrift für Musik*. Vol.27, No.40 : 239.

BRUSNIAK, Friedhelm

1995 “Chor und Chormusik”. in *FINSCHER, Ludwig(Hg.) Die Musik in Geschichte und Gegenwart*. Sachteil 2 : 766-824. (Kassel : Bärenreiter.)

DAHLHAUS, Carl

1980 *Die Musik des 19. Jahrhunderts. Neues Handbuch der Musikwissenschaft*, Bd.6. (Wiesbaden : Akademische Verlagsgesellschaft Athenaion.)

ECKHARDT, Josef

1978 “Arbeiterchöre und der ‘Deutsche Arbeiter-Sängerbund’”. in *STEEGMANN, Monica(Hg.) Musik und Industrie : Beiträge zur Entwicklung der Werkschöre und Werksorchester* : 45-59. (Regensburg : Gustav Bosse Verlag.)

HÄRTWIG, Dieter ; LANDMANN, Ortrun ; STEUDE, Wolfram

1994 「ドレスデン」樋口隆一（訳）。柴田南雄；遠山一行（編）『ニューグローヴ世界音楽大事典』第12巻 : 83-93. (東京 : 講談社.)

井上登喜子

1998 「R. シューマンと「合唱協会」の活動」, 『音楽学』 第44巻1号 : 16-29.

野田宣雄

1997 『ドイツ教養市民層の歴史』 (東京 : 講談社.)

REIMER, Erich

1993 “Nationalbewußtsein und Musikgeschichtsschreibung in Deutschland 1800-1850”. *Die Musikforschung* 46(1) : 17-31.

SALMEN, Walter

1988 *Das Konzert*. München : C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung. =1994 『コンサートの文化史』上尾信也 ; 網野公一（訳）。(東京 : 柏書房株式会社.)

The Choral Societies and the Middle Class in the 19th Century Dresden.

INOUE Tokiko

This paper examines bourgeois choral societies founded in the 1830s and 40s in Dresden, focusing on the male chorus *Dresdner Liedertafel* and the mixed chorus *Robert Schumannsche Singakademie*.

The material in this paper is derived mainly from two memorial publications, each issued at the 50th anniversary of foundation (DL 1889, RSSD 1898). Analyzing such details as the organization, time and place of performance, and performing repertoires, the following points became clear.

On the one hand, an obvious difference is observed between the male chorus and the mixed chorus: while the former reflects political and patriotic trend of the age, the latter consistently concentrates on the performance of oratorio. On the other, as a matter of even greater importance, the two societies have five significant common features, namely: 1) close relationship to the Court, 2) cooperation in performance, 3) importance of sociability, 4) pursuit of high-quality performance, and 5) participation in the formation of the canon of 'great works' within Western musical culture. To conclude, it is clear that such similarities arise from the common attitude of the educated people not only toward musical activities but also toward German musical culture.